

長期連載論文

第5回

文明の輪廻転生

—アトランティス異聞—

第四章 アトランティス科学の目

会長 渡辺豊和

大宇宙と小宇宙

古代インド人は広大な宇宙を大宇宙、人間を小宇宙と考えたことはよく知られているがこれは何もインドに限ったことではなかった。インドよりも古い古代エジプトも更にインドよりも遙かに新しい文明であるギリシアでもほぼ似た考え方が一般的であった。但し宇宙全体に大地（地球）も含まれているかどうかはインドでもエジプトでもギリシアでも曖昧ではあった。始めに天と地が一つでありそれを天地に分けてしまったのが神であり父なる天と母なる大地が交合して人間が誕生したというのがエジプトの創造神話であるから当然人間は大地に似ていると考えられていたはずであるが、はどうも似ていたかははっきり書

かれた文章が残っていない。ところが中世の北欧神話に出てくる巨人ユミルは三人の原初の神々によって殺されるが「ユミルの身体からは世界が、血からは海と湖が、骨からは岩が、髪の毛からは樹木が、頭蓋骨からは天蓋が造られた」と語られている。頭蓋骨から天蓋が造られたのはいかにも人間中心な見方ではある。大地が人間の身体に見立てられているとしても確かに人間から見て上部、即ち頭部に当たるのは天に違いない。首から上が天、下は大地（地球）と言うことである。この北欧神話は至ってイメージが具体的である。樹木を髪の毛に見立てているのは傑作である。髪の毛は頭に生えているのに首から下とされる大地にある樹木に見立てられるのはおかしいとも思えるがこれは中世の神話、この矛盾を問いつめても致し方あるまい。重要なのは大地を身体に見立て

ていたと言うことである。中世の北欧はほとんど古代のままの文化であったから中世神話とはいつても古代からほとんど歪曲されることなしに伝承されたものに違いない。同じく古代のままの生活をつい最近まで続けたポピ・インデアンは大地はトウモロコシの母として姿を現すと信じていた。トウモロコシは人間の身体に似ていると彼等は考えていたから彼等も大地は人間によく似た生き物であると思っていた。人間はトウモロコシを食べて肉体が形成されるとするのはトウモロコシを主食とするのはトウモロコシを日常生活から着想されたことであるが、大地⇄トウモロコシ⇄人間の循環関係が想定されていることもうかがえる。中世ヨーロッパの神学者にとってエデンの楽園は肉体の中の心臓でありこのエデンの楽園から人間の物質的形態の象徴である陸地（肉体）

の維持のために、生きた水（血）が流れる河（動脈）が湧き出てくるとマンリー・P・ホールは『人間―神祕の大いなる象徴』に書いている。ここでは陸地が身体全体であり身体に栄養を供給する血管と血液がそれぞれ河と河水に見立てられている。以上数例の地球を人体に見立てた古代中世の神話ではあるがどれも極めて大雑把でどうも纏りもなく断片的な印象がぬぐえない。これに比べると中国古代からの地理学である「風水」では大地（地球）と身体は見事に照応している。大地には龍脈と呼ぶ気の流れの流路があり、これは身体では経絡に当る。経絡は身体の中で気が流れる流路であり中国医学で大変重要視される。又風水では龍穴と呼ぶ穴が大地にありそれは身体のつぼに当る特異点である。つぼは灸を据えたり針を刺す場所でありこの刺激を経絡で患部に連絡する。西

洋医学にはない身体機構である。つぼも経絡も解剖学的には目に見えないがそれを使って確実に治療が行われ成功しているから身体内に存在しているのは間違いない。最近の針灸による東洋医学の盛行は目に見えなくてもつぼも経絡も重要な身体機構であることを実証している。龍穴には気が吸い込まれるからここに住宅や墓を作れば健康に恵まれ子孫が繁栄すると中国では考えられている。この場合の住宅や墓などの建物は身体治療の灸や針に当ると言うわけである。但し龍脈は主として山の尾根であり龍穴は山の麓の平地にあるとされている。風水ではこれほど身体機構とはつきり照応して大地が考えられているから風水術は大地（地球）の治療のための術であると考えられてもいたはずである。風水術では気（エネルギー）の流れが大事であるがこれは「風水」の中の「風」

のことであり当然「水」は河川を流れる水のことである。これは血液に当たる。風水術では龍脈、龍穴と同じく重要なのは河川による水の流れであるのは言うまでもない。世界の四大古代文明地のエジプト、メソポタミヤ、インド、中国の中でインドも大地（地球）は人間の身体に見立てられているが大雑把であり断片的であるのに何故中国だけでその見立てが精緻であり医学的なのであるうか。エジプトもメソポタミヤもインドもそれぞれナイル、チグリス、ユーフラテス、インダスと大河の流域に栄えた狭い地域の文明であるからそこにすんでいた人々には広大なこの地球を全体としてとらえる感覚は発達しなかつたのではないだろうか。狭い場所の人々にとっての世界はやはり狭い自分達の生活圏域に限られてしまう。ところが中

国文明は古代から広大な国土の上に成立した。もちろん黄河流域を主とはしているが揚子江にも高度文明はあったし中国の古代国家、殷（BC一四〇〇〜BC一〇二七年）にしても周（BC一〇二七〜BC七七〇年）にしても広大な国土であった。従ってこの広大な国土にすむ人々にとつても「世界」は広大であり地球全体を人間の身体に見立てるくらいのことはできたのかも知れない。それでも中国文明の中心地は長安や洛陽の内陸であったからか、風水でも海のことについてはほとんど触れられていない。これは残念なことではある。もし古代中国人が海に関心を寄せていたら身体見立ての風水術の地理観ももっと魅力あるものになっていただろう。

断片的であるがエジプトにもインドにもギリシアにも人間身体見立ての地球（大地）観はあったし中世北欧の見立てはイメージとしては鮮やかで現代人の私達にも充分納得し易い。私は拙著『発行するアトランティス』（人文書院、一九九一年）で今から一万一五〇〇年前に一夜にして海没してしまったアトランティス文明こそ全世界を統一した文明であり古代の四大文明ともにアトランティス文明から派生したものであり源流は一つであると主張し今その考えに変わりはない。中国の風水は大地（地球）を人間身体に医学的に見立てているがかつてのアトランティス文明では中国以上の精緻さで大地（地球）は人体に見立てられていたのではないか。そして大洪水や地震などの天災によって病んだ大地（地球）はアトランティス文明の風水術によって治療されていたのではな

いか。と私は考える。実はそう思える証拠がある。今から六〇〇〇年前、即ちBC四〇〇〇年前後地球上では至る所にピラミッドを始め巨石建造物が一斉に造られた。丁度この頃は地球の温暖化が最も激しい時期に当る。日本の学者が縄文海進期と呼んでいる時代である。この頃、地球には大洪水を始め種々様々の大災害が頻発したのではあるまいか。即ち地球は病んだに違いない。それを治療するためにつぼに針を刺すように龍穴に巨石建造物を建てたのであろう。しかし巨石建造物は必ずしも平地だけに建てられたわけではない。標高一〇〇〇メートルを越す所にもあれば絶海の孤島の上にもある。つぼに当る龍穴に巨石建造物を建てるのであるから中国風水の龍穴が山の麓の平地だけにしかないのならば何故その当時の人々は高山の山頂や絶海の孤島にも巨石建造物を建てたの

であろうか。それは多分こうである。龍穴は必ずしも山の麓の平地に限られるのではなく高山山頂にも絶海の孤島にもある。中国風水では龍脈は山の尾根であるが尾根は目に見えるがこれに当る経絡は目に見えない。又山の尾根に沿って確かに風は流れるが気を運ぶのは主として風であるとしても気は必ずしも山の尾根沿いに流れるばかりではない。経絡は身体の至る所に張り巡らされている。もし龍脈が経絡に当たるのであるなら山の尾根など目に見えるのはなく別のものであるだろう。又山の尾根ならば陸地にしか経絡に当る龍脈はないことになる。到底地球全体に龍脈がはり巡らされていることにはならない。それでは真の龍脈とはどんなものであるのか。これの探究こそ本書の主題である。探究の鍵は巨石建造物であり、これが地球には巡らされたネットワークの交点に

存在しているのであればそのネットワークこそ龍脈なのである。多分古代中国が龍脈と言っていた山の尾根は目に見えるから人体では解剖学的に目に見える神経に相当するであろう。

いづれにしても今から六〇〇年前の世界を復元してみなければならぬ。日本では縄文時代の真只中である。縄文文明は高度文明であったと前著□縄文夢通信□(徳間書店、一九八六年)で強調したがこれから一〇年後に青森の三内丸山遺跡が発掘され私の予想は正しかったことが証明された。しかしこの遺跡はBC三五〇〇年から一五〇〇年間のものであり新しく今まで発掘された範囲でも当時の人々の地理観を如実に示すものは殆どない。この遺跡より南一〇キロメートルのストーンサークル、小牧野遺跡にその片鱗を見るだけである。又二年前(一九八八年現在)に大評判となったグ

ラハム・ハンコックの「神々の指紋」もアトランティス文明の復元を試みたと書かれていて確かに衝撃的ではあるがどうもうさん臭い。というよりも知ってか知らずかははっきりしないが余りに『発光するアトランティス』に似過ぎていて私は奇妙な気分になってしまった。情報が瞬く間に全世界を駆けめぐる現代では洋の東西に酷似の着想があっても別に不思議なことはいであるうが。

生命の連鎖と地球劇場

それにしても小豆島ほどの絶海の孤島にヴェニスにも匹敵する都市を建造する必要がどうしてあったのであろうか。ポナペ島のことである。しかも現在で

すら五万人に充たない人々しか住めない狭い島でどう人を集めどんな技術であの巨大な石造建築物を造り上げていったのか。いまだこの謎を解いた人はいない。それも一世紀以後のことであり歴史学的にはつい最近の出来事ではないか。海の文明の謎は高々一〇〇〇年前にまでも及んでしまうのはやはり先文明であるアトランティスの技術が太平洋の島々に遺存したということではあるまいか。大陸型の現今の文明に駆逐されなかったのであるう。もともと海は生命、特に動物のふるさとであり動物は海から発生し陸に上つていったとされている。人類の文明も、少なくとも現今の文明の前文明が広大な海洋上にその花を咲かせたのも海が生命のふるさとであったからではないか。古代の人々は宇宙や地球を人体に見立て宇宙や地球も生命体であると考えていたのはエジプトやイン

ド、中国の神話から知ることができる。特に中国では大海の向こうに不老不死の島があると信じそこに不老長寿の薬を求めて若い男女各一〇〇〇人を大海に送り出した秦の始皇帝すらいる。これもアトランティス文明の記憶を伝えていたから起こった事件だったに違いない。アトランティスの科学は不老不死を実現していたと後世に伝えられたのであるう。しかも中国には医術、風水術、易学とどう見ても現代科学とはまるで違った体系の科学が伝えられている。針麻酔、地形や方向による吉凶、運命など現代科学の因果関係では到底解き得ない事柄がまるで魔術さながらに見事に展開していく。中国の古代科学を見ているとどれも目に見えないものが見えているかに見立てられているのに気付く。風水術では地球を人体に見立てているが、人体でも地球でも重要なのは気の流れであ

る。「氣」はプラトン流には魂である。プラトンもアトランテイス文明を伝えられた者の一人であったのは彼の著述でも明らかであるがそのプラトンの著述と古代中国の科学を重ね合わせ得た世界像を更に縄文夢通信網（又は装置）を通して解析していくとそこには明瞭な地球医療の実体が透し見えてくる。いずれにしても地球にとつて地球が生み落とした生命は人間にとつての魂に相当するのは間違いないであろう。地球自体は人体、器である。様々な生命が命の限り演じ合う舞台、劇場であるに違いない。しかも無数の各々の生命は鎖のように繋がっている。これを地球レベルの規模で絵画化、視覚化したのが縄文夢通信網だったとも言える。

地球は常時癒されて

いた

古代中国科学、プラトン、縄文夢通信の関係については少々難しくなったが簡単にいうとこうである。中国の医術ではつばに針を刺すだけで麻酔ができるし、薬を使わずに治す気功の方法などヨーロッパの近代医学では信じられない奇蹟を実現してみせる。これを中国の人々は「氣」のなせる技であると言う。風水術でも住むに良い地形と悪い地形、更には方向がありそれに反する所に住むと不幸になるとするがこの迷信に近いことが実は的確に当たってしまうのである。「易」にそって運命を占うとどうしてかは分からないが百発百中してしまう。これは私自身三〇人程の人にしたことだから間違いない。これらのことは

「氣」の流れに関係すると中国の人々は言うが氣は空気や風と同じく目に見えない。運命もどうも氣の流れ方の型として六四の「掛」が作られているらしい。

易の六四掛が幾何学的な構造になつていて遺伝子と同じ二重螺旋に陰陽が連なつていると言う人もいる。こうなるとプラトンの幾何学や比例数に置き換えても別におかしなことにはならない。プラトンは何事でも調和して美しいものは幾何学的な整然とした結晶になつていいるが直接目には見えないと言っている。人が病氣にならないのも魂が幾何学的に整然と配列して人体の中にあるからだとしている。魂は氣とほぼ同じことであるからここでプラトンと中国の古代科学は重なる。プラトンは人体の中に魂がまるで結晶になつて並んでいると考えたのは中国古代科学の氣の流れも似たイメージでとらえていいことを教えてい

る。中国医術とほぼ同じ型でできているインド瞑想術の「氣」はチャクラで有名であるが、チャクラは正多面体で表現されているからわかる。

縄文夢通信網は無数の球面三角形で出来上がっている。これを遙か上空から見たら地球は結晶状に見えるはずである。しかもこの通信網を日没か日出の太陽光が走るのだからこの太陽光こそ地球の「氣」なのである。この太陽光、即ち氣の流れがスムーズな場合は地球は病氣にならずに済んでいることになる。巨石が円環状に配列されるストーンヘンジやストーンサークルはBC二七〇〇年頃に全世界一斉に造られたし世界の殆どのピラミッドはBC四〇〇〇年頃に建造された。ストーンヘンジもピラミッドも通信網の交点か、その線上に造られる。ここ一万年以内でBC二七〇〇年頃是最寒冷期、BC四〇〇〇年頃

は最温暖期であるからこれらの建造物は気候異変を癒すために造られたに違いない。それなら縄文夢通信網はアトランティス科学の成果ではないのかとなりそうであるがそうではない。BC四〇〇〇年からBC二七〇〇年にかけて全世界的に復元されたのだ。復元は新たに造るよりは遙かに容易であったはずである。アトランティス時代には地球には常時癒されるための種々様々の仕掛けが施されたはずである。

三内丸山時代の地球

医療

三内丸山では信じられないほど不格好の高樓に復元されたがこれは噴飯物である。富山の桜町遺跡では現代の大工達も顔負

けの高度で複雑な木材組み立て技術が今から四〇〇〇年以上前に使用されていたことがわかった。ホゾと仕口で木材と木材を繋ぎ組み合わせ正確に垂直、水平なジャングルジムの加工を組み立てていたのである。縄など使用する必要がなかったのに三内丸山の高樓では柱と梁は縄で繋ぎ合わされている。こんな素朴で低い技術ではなかったのである。日本では文化文明は弥生時代になって退化したことを考古学者は知るべきである。いずれにしても三内丸山の時代にはアトランティス文明の地球治療の技術「風水術」は伝えられ活用されていたであろう。これは巨石建造物だけではなく夢エネルギーの活用でもあるから「縄文夢通信」にもう一度立ち帰って見る必要がある。

西北タイ山地に住むヤオ族は焼畑農耕民でありよく移動するが移動後の村落の位置を決める

国見の方法がある。理想の地形を選ぶために考えられた基準があり最も人体に似た地形こそは村落を形成するに適した場所なのである。頭が村落の場所であり両手を前に延ばして何かを抱きかかえる形をした地形を理想とした。又村落の背後には山がなければならぬ。ものを抱きかかえる両手の間は谷か川、又は湖となっていて水流があることが望ましい(図4-1)。このヤオ族の国見の方法も大地(地球)を人体に見立てているのでありよくよく考えると三内丸山の地形こそヤオ族の理想地形で

はないか。ものを抱きかかえるために伸ばされた両手は津軽半島と下北半島、それに挟まれた水流は陸奥湾である。三内丸山はその陸奥湾のどん詰りにあるからまさに頭である。又、三内丸山の背後には八甲田山が控えている。特に下北半島の北、恐山などのあるマサカリ形の所は手のひらに酷似しているから三内丸山こそヤオ族の理想地形に造られた「縄文都市」であったことがわかる。西北部タイの山岳民と全く同じ人体見立ての地理観を抱いていた三内丸山の人々はヤオ族とは時代も場所も

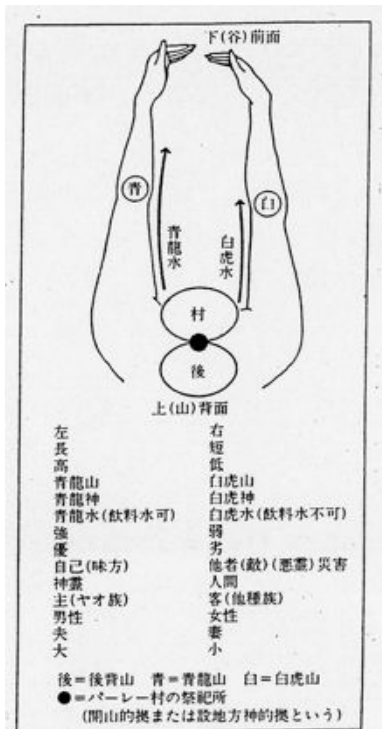


図13 ヤオ族の地形観と理想的な村落の立地(出典:常見純一1980「ヤオ族の移住と村落形成—マーン=ラーン=トン(国見)を中心として—」山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編「東南アジア・インド社会と文化」下巻、山川出版社、202頁)

図 4-1 ヤオ族の地形観と理想的な村落の立地(風水気の景観地理学より)

大きく隔てているのに不思議と言えば不思議な存在ではある。しかし実はこのことは少しも不思議なことではなく縄文時代にこそ人体見立ての地理観が世界中の人々の常識であったことを示しているのだ。ヤオ族は大地になぞらえる人体としては頭と両手しか意識していないが胴体と両足は省略されているのかそれとも完全に忘れられているのか。多分省略されているのである。中国の医術書には人体全体が描かれつぼと経絡、更に内臓や肺などの臓器も当然ある。ところがインドの人体図は座像であり両足は座禅のように組まれているから全体として球形に近い(図4-2)。ギリシアの哲学者プラトンは人体は球形であり地球(プラトンは大地は球形であることを知っていた)に似ていると考えていた。インドの人体の意識に近い。インドのタントラ密教では生命力であ

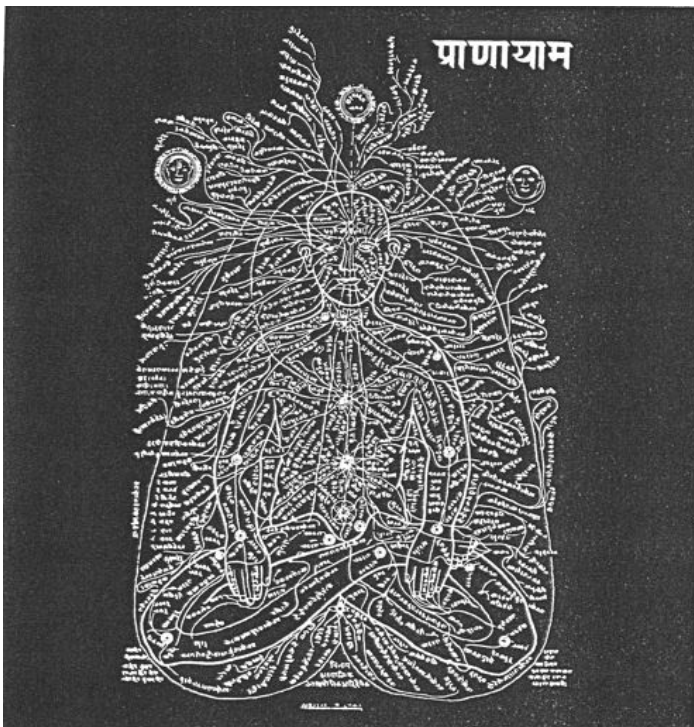


図4-2 「ナディ」チベットの図像(イメージの博物誌より)

るプラーナ(中国の気と同じ)の通る導管はナディと呼ばれ人体全体に網目をなして張り巡らされているから経絡と同じことを言っている。このナディは三五万本ありそのうち重要なのは一四本である。更に中でも三大聖河ガンジス河とヤムナ河、スラスヴァーティ河になぞらえる

三本は根本的ナディとされている。インドの人体図はヤオ族では省略されている胴体と両足が描かれているからこの二つを合体させた人体見立ての地理観がアトランティス文明以来のものだったのではないか。中国医術の人体はインド・タントラの人体を更に精緻にしたものである

う。
さて三内丸山はBC三五〇〇年からBC二〇〇〇年までの一五〇〇年間の長きに亘って存続した「都市」であるがBC二七〇〇年頃に地球はここ一万年の間では最も寒冷化している。BC四〇〇〇年が同じく最高温であったから一三〇〇年の間に世界の気温は最高から最低へと急激に変化したわけである。その間の気温変化は年平均で五度位である。これだけの変化があれば高温化して現在の北海道南部が関西程度の気候となるはずである。低温化したら関西は今の北海道南部くらいにまで寒冷化する。三内丸山が造られた頃から八〇〇年くらいで極度の寒冷化がやって来た。三内丸山が存続した一五〇〇年のちょうど中間の時期である。その頃にここより一〇キロ南に小牧野にストーンサークルが造られている。十和田の南にある有名な秋田県

大湯のストーンサークルも最近発掘された秋田県北部の伊勢堂岱のストーンサークルも同じ頃に造られている。巨大ストーンサークルであるイギリスのストーンヘンジも同じ頃に造られているから世界が寒冷化したBC二七〇〇年頃に当時の人々はストーンサークルを世界の各地に造って地球を癒したのではないか。小牧野のストーンサークルの真東にある鞍型の丘、雲谷峠は多分地球がここ一万年間に最も温暖化したBC四〇〇〇年頃に造営されたであろう。ピラミッド型の山稜を造営したり直列の巨石建造物を建設したのがBC四〇〇〇年頃でありこれは温暖化によって引きおこされた世界の異常事態を治療するための巨大装置（地球上の灸）であったのではないか。又、寒冷化に当たっては世界各地にストーンサークルを造ったのに違いない。これは中国医術では針に当たる

のかもしれない。
ちなみにイギリスのストーンヘンジの北二〇キロメートル未満にある人工円丘シルバリーヒル（高さほぼ四〇メートル）はBC四〇〇〇年頃造られたとイギリスでは信じられている。

人体見立ての方式

「風水」が大地（地球）を人体に見立てた古代地理学の最も正確な痕跡であるとして間違いないであろう。しかし中国医学の人体図と比較すると龍脈や龍穴は空想の動物である龍に見立て、その龍を更に人体に見立てているせいか視覚的には理解し易いにしても随分大雑把でありどうもこれはアトランティス科学の一端しか示していない気がしてならない。古代中国人は気の発生する場所を崑崙山である

と考えた。崑崙山は中国の西方にあるとされる伝説の巨峰ではあるが現在ではチベット高原の北を走る山脈全体のことを言っている。世界の最高峰エベレストのあるヒマラヤ山脈の方が世界の尾根又は屋根と言っているのであるが中国人にとって直接関わるのは崑崙山脈であるからこれを「崑崙」と言いはじめたのである。いずれにしても気が流れる大元を崑崙山とするのは中国人の自民族中心主義即ち中華思想の表われであって、本当は世界の最高峰こそ気の発生源であるはずである。そうなることとなる。しかしこれもどうも怪しいのではないか。中国人は目に見える具体的イメージを大事にするから龍脈や龍穴を経絡や経穴（つぼ）に見立てたと同じく彼等にとって世界で最も高い場所、崑崙山を気の発生源

と考えたのではないか。地球にあっては目に見えない最高のエネルギーは磁気であろう。これを発する場所は北極であるから北極こそ気の元、即ち元気の場所には違いない。中国医学では脳や神経は無視されているが人体でもやはり気の発生源は脳ではないのか。又経絡は皮膚のすぐ内側に張りめぐらされているし、経穴は皮膚の上にある。その経絡は身体内部の脳、内臓、筋、骨と結ばれているだけでなく眼や耳などの感官とも繋がっている。神経は脳を中枢として内臓、筋、骨、更には眼や耳の感官と繋がっているから経穴、経絡も脳、神経と繋がっているはずである。アトランティス文明人がどんな科学体系を築いていたのかは勿論よくわからないが縄文夢通信が全世界を覆っていたとしたらそれは極めて精緻であり大地と人体に見立てる方式も精密であったのではないか。古代中国人

が無視した脳や神経を含めて大地は人体に見立てられていたと言っていていいであろう。スラウエシ、アトランティスを人体の中心とみなしヘソとして地球人体図を作ってみた。但し手、足は体の前で組む座像である。ともあれアトランティス科学の残存度の最も高いと思われる古代中国の科学をまず概観してみる必要はある。

メヴラーナの舞（トル

コの神秘舞踊）

一九八九年のトルコ出張の時のことである。現地に住んでいた若い日本人建築家Y君に誘われイスタンブール郊外の古い小寺院を訪れた。Y君の説明ではこの寺院はイスラム教ではあるがメヴラーナというスーフィの

聖者を崇める異端の宗派で今は禁教となっていてこの信者は隠信仰を強いられているとの事だった。そのせいか随分荒れ果て内部の壁の漆喰は所々ひび割れ剥がれていたりする。この宗派は独特の踊りをする「踊る宗派」であるという。Y君は内部を一廻りしてからこの寺院の入口に戻り破れ扉の上部を指差し半球の突起に注目せよと言う。球状突起にはイスラム紋様の浮彫りが施されている。彼が信者達に聞いた所この突起はメヴラーナとその宗派の秘密が隠されているのだがその秘密は教えてもらえなかったそうである。この当時私はアトランティスがスラウエシにあったことは突き止めていたがそれ程詳細に亘って論証する所まで至っていないかった。又現在ほどスーフィズムに深い関心もなかった。只この時この半球形の突起がアトランティスの秘密を開示するに違いな

いと直観し克明に写真撮って来た。この時から七年後、九六年に国連のハビタット「イスタンブール九六」のシンポジウムの発言者として招かれイスタンブールの大学の講堂でメヴラーナの踊りを見る機会があった。白い山高帽をかぶりたぶたぶの白い麻布の衣をまとい両手を大きく水平に広げて反時計廻りにゆっくりと回転するだけの事であった。はじめは一人、次に又一人と少しずつ人数が増え最後は二〇人程がそれぞれ回転しながら全体でも輪舞をするからまるで渦巻きを見ているのであった。いずれにしても静寂そのもので幻想的であった。大きく水平に広げた手のひらは右が上を向け「天」を左は手のひらを下に向け「地」を示す。しかも反時計廻りに回転するのだからこれは宇宙を象徴しているよりも地球の自転を示しているのではないかとも思った。とはいえ一

人一人は地球などの惑星であつて小グループで太陽系、全体で星雲を写しているのである。ことわるまでもないが地球の自転は反時計廻りである。この踊りを見ながら私は小さな古寺院の破れ扉の半球形突起を思い出していた。もう一度そこを訪れたかったがスケジュールが立て込んでいてとてもその余裕はなかった。この時のトルコ出張は私にトルコ国から建築設計の仕事の依頼も重なっていたからである。この時には『発光するアトランティス』発行して六年も経っていたがまだ半球形突起の謎は解けていない。この謎解きは本書執筆の動機になるまでそれは持ち越されたというわけである。それではその謎はもう解けたのか。『発光するアトランティス』でもこの半球形突起に触れたがまだよくわかっていなかった。むしろ紋様を極度に単純化してしまった為かえって正解

にたどりつけなかった。球形に正五角形が一二個刻まれるはずが半球形である為六個となっていてそれが球に内接する正二二面体を表徴しているというのがこの時の回答だった。決して間違っていないがそれだけでとどまらない。半球形突起の紋様を適当に省略して単純化してはいけなかった。そのままで見ればきだった。いつも原典を一字一句改変せずそのまま読まなくてはその中に込められている「謎」は解けないと自戒し著書でも強調しているのにここでは自分に課しているルールを破ってしまった。これが失敗のもとだった。但しこの謎を解くにあたって古寺院の半球形突起だけでは無理がありこの紋様をそっくりそのまま平面で展開していった大寺院入口の扉の紋様が役立った。これも八九年に訪れた時のことであるがイスタンブールの大寺院スレーマニエ・モスク

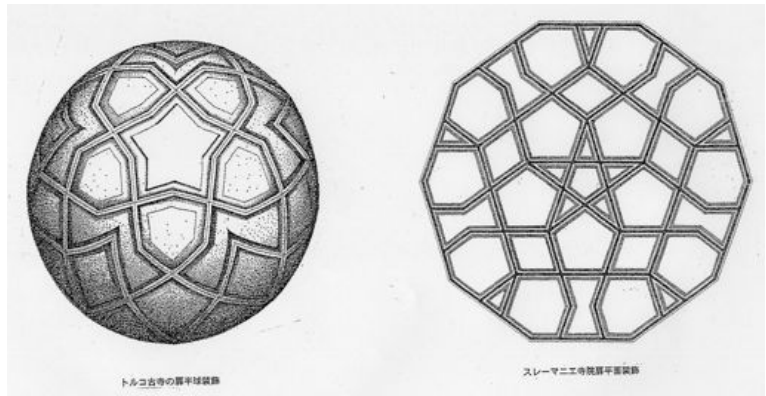


図4-3 トルコ古寺の扉半球装飾、スレーマニエ寺院扉平面装飾

の正面入口の扉を克明に写真に撮っていた。その写真が役立つ。とはいえこの扉上部にあった半球形突起ではなくその下部に浮彫りされた平面紋様である。中心に五芒星形、それを五つの正五角形がとりまき更に一〇個の六角形が外回りをとりまく。

この紋様の特徴は五芒星形と多数の分割面である。五芒星形は魔術の象徴図形であり日本の安倍晴明の陰陽道もこれを使用している。まずはエジプト渡りの象徴図形である。後述するがBC一五〇〇年頃エジプトのハトシェプスト女王は理想郷プントに使節を派遣したがその時使節が持ち帰ったアトランティスの秘密図形こそイスタンブールの古寺院の破れ扉の半球形突起の浮彫りだった可能性が高い。メヴラーナはエジプト魔術を伝えた最高度の魔術師だったであろう。エジプト魔術は科学でもあるがこれを継承したのはアラビア科学であったことは中東世界では誰でも知っている。さて謎を解くのであるが結論のみを記す。まず半球形突起とそこに浮彫りされた紋様は地球とそれに内接する正多面体を示している。中心の五芒星形の中の五角形と五芒星をとりまく五つの五角形、

計六つの五角形は球では二倍となるから一二である。ということはこれは地球に内接する正二二面体を示している。それから五芒の五つの突起三角形。正二二面体の正五角形の図心を結んでいくと二〇個の正三角形が得られそれは正二〇面体でもある。これが古代から知られている立体幾何学の神秘というか不思議である。五芒星形の五つの三角形は正二二面体を正二〇面体に転換する象徴部分であり五芒星形全体ではその転換の象徴図だったのだ。このことが魔術の象徴となるのはなんとなく理解出来るであろう。さて五芒星をとりまく数多くの分割面を数えりと三〇面である。但し五芒星の三角形五面と中心の五角形は除いている。というのもこの中心の五芒星は地球に内接する正多面体を暗示しているからである。三〇面の分割面ということは地球全体として六〇面

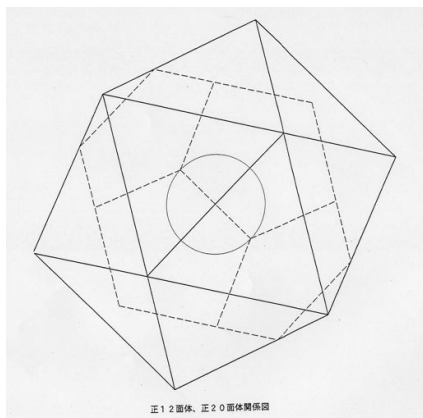


図4—4 正12面体、正20面体関係

であることを示す。ところが地球に内接する正一二面体と正二〇面体を重ね合わせると正三角形を三等分する変形四角形が六〇面たちあらわれる。以上のことから古寺院の破れ扉上部の半球形突起は地球に内接する正二面体と正二〇面体の合成多面体であった。それがどんなものか、はすぐ後に説明する。ともあれこの秘密図形をプリントから持ち帰った使節はその意味を解いたであろうか(図4—3・4—4)。

地球は一つの結晶体

か

八六年に『縄文夢通信』を著した時に日本列島を覆う夢通信網が世界にも同じくあったのではないかと考えたがそれを確かめるには巨石を巡って世界を歩かなければ確信は得られまいと思ひ深く追求することはなかった。しかしそれでも全世界・地球を覆う何らかのネットワークが存在したのではないかと言う強い思いは断ち切れなかった。これも直観ではあったが地球に正多面体を内接してみたり、試行錯誤を繰り返していた。正四面体から正二〇面体までやってみたがどうしてもしっくりしない。但し二点は必ず北極と南極に固定した。それだけなら正多面体が回転してしまうのであるべくギザのピラミッドの位置す

る東経三八度〇八分上に三点めが来る様にした。三輪山の位置する東経一三五度五二分〇一秒に重ねることはしなかった。世界の辺境としか思えない日本に世界ネットワークの交点が位置するとはどうしても考えられなかったからである。地球は球であるから特異点である両極以外地球上のどの点をとつても全て同じ位置づけにあるはずなのに、そう思えないのは世界に於ける日本の地理、歴史的位置が余りに偏り過ぎているからであろう。これも一種の日本人としてのコンプレックスなのかもしれない。いづれにしても色々な試行錯誤のすえ、ようやく三二面体を地球に内接して始めてネットワークらしき多数の三角形が浮び上つて来たのであった。これが『縄文夢通信』に載せた世界ネットワーク図である。この時の結論はこうである。三二面体によって現われる地点にはイ

ースター島、バリ島(インドネシア)、バハマ諸島、ガラパゴス島など太平洋上の謎の島といわれるところに交点がきていて、しかもそれらの小島ではエジプトの古代文明とよく似た遺跡や文化をいまに伝えている。と。しかしそれでもどうも納得がいかない。そうこうしているうちに見事な図形と出会った。ソ連の学者達が制作したものだと言う。正一二面体の頂点を両極、一稜線をギザの東経線上に重ねて地球に内接してから、それを正二〇面体に変換して重ね合せた図である。これは美しかった。しかも神の図形であるとプラトンが言った正一二面体が主であることが私には重要に思えた。この図の解説に交点にはエジプトのナイルデルタやガラパゴス島近傍等古代遺跡地や地理的特異点、稜線は山脈や海溝と言った地質学的特異地形を示しているとある。しかもその結論とし

て地球はかつて一つの結晶体だったのではないかと言うのである(図4-5)。これは衝撃的な仮説であった。

このことが重大な連想を生み出した。プラトンのアトランテイスを探っていた時であったからこの図はアトランテイス文明と深い関連があるのである。プラトンの『ティマイオス』『クリティアス』を熟読してアトランテ

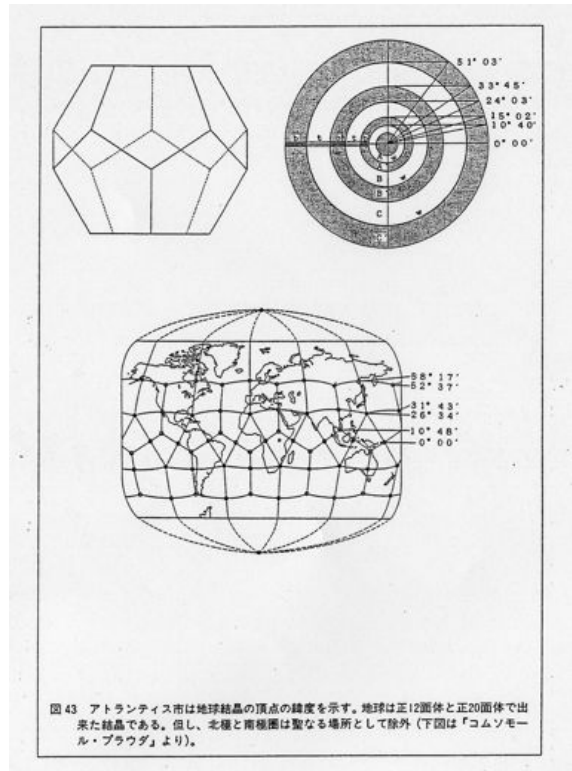


図4-5 〈仮〉地球結晶体

スはエジプトと密接な関係がある場所であったことが分つていた。しかもアトランテイスの大王は世界を一〇に分割して統治したと言う。正一二面体を地球に内接して表われて来る一二の正五角形のうち両極に接する部分は除外するとすれば一〇の正五角形が地球を円環状に取り巻く。これが世界の一〇分割であったのではないか。等々を後に『発光するアトランテイス』で

追求することが出来たのである。

交点に新旧石器時代の

の遺跡が必在する

『発光するアトランテイス』では主題が一夜にして海没したアトランテイス島の位置を探し出すことであつたからこの図に深く関することはしなかつたがそれ以降一つ一つの交点を丹念に調べてみた。但し交点の総数は六〇である。その交点の一つはインドネシアのスラウエシ島でありこれが海没したアトランテイス市の位置であるとした。その他アトランテイスの一〇国とは北極、南極を除いた一〇個の正五角形であることは今述べた。このことは現在でも確信しているがそれ以後更に六〇ヶ所の交点のうち陸地に位置する計二二ヶ

所の交点を調べてみた。『世界考古学地図』(ホワイトハウス著、蔵持不三也訳、原書房)によつて交点と遺跡との関係を探つてみた。結果は何と例外なく全交点には新旧石器時代の遺跡が位置していたのである。これには調べた私自身狐につままれたのかと思つた位である。但し稜線の平均長さが四〇〇〇キロであるから一パーセントの誤差は許すとして交点を中心に半径四〇キロ以内を含むものとした。現中国の唯一の交点北緯三一度四三分東経一〇三度〇八分は四川省の省都、成都から西北に一五〇キロの位置である。つい最近(九六年一〇月末)日中の学者が共同で成都の西南四〇キロの龍馬古城遺跡からBC二五〇〇年の稲作遺跡を発掘したと言うニュースが大々的に伝えられたがこれはこの交点から二〇〇キロも離れてはおらず誤差範囲ではないが成都の西側一〇〇キロ

に南北に帯状に重要遺跡が数多くありこの交点に遺跡が眠っている可能性が高い。又この交点の北四〇キロ以内に馬廠遺跡（住居跡）もありこの遺跡一帯に住居遺跡が多数発見されている。馬廠はそのうちの最南端である。いずれにしてもこの交点の近傍地は早くから文化が発達した（図4—6）。

こうして二二ヶ所例外なく新石器遺跡が出土しているのはこの交点近傍には人々が早くから住みそれなりの密度で都市なり集落を営んでいたことを示している。同時に最新でもBC四〇〇〇年前後の時代までに世界の人々は極めて正確に地球を幾何学的に分割し整然とした方向と距離を置いて文化文明を構築していたことがわかる。ソ連の学者はかつて地球は結晶体でなかったかと言っているがもしそうであったら多面体の頂点には特殊な地中エネルギーが蓄えら

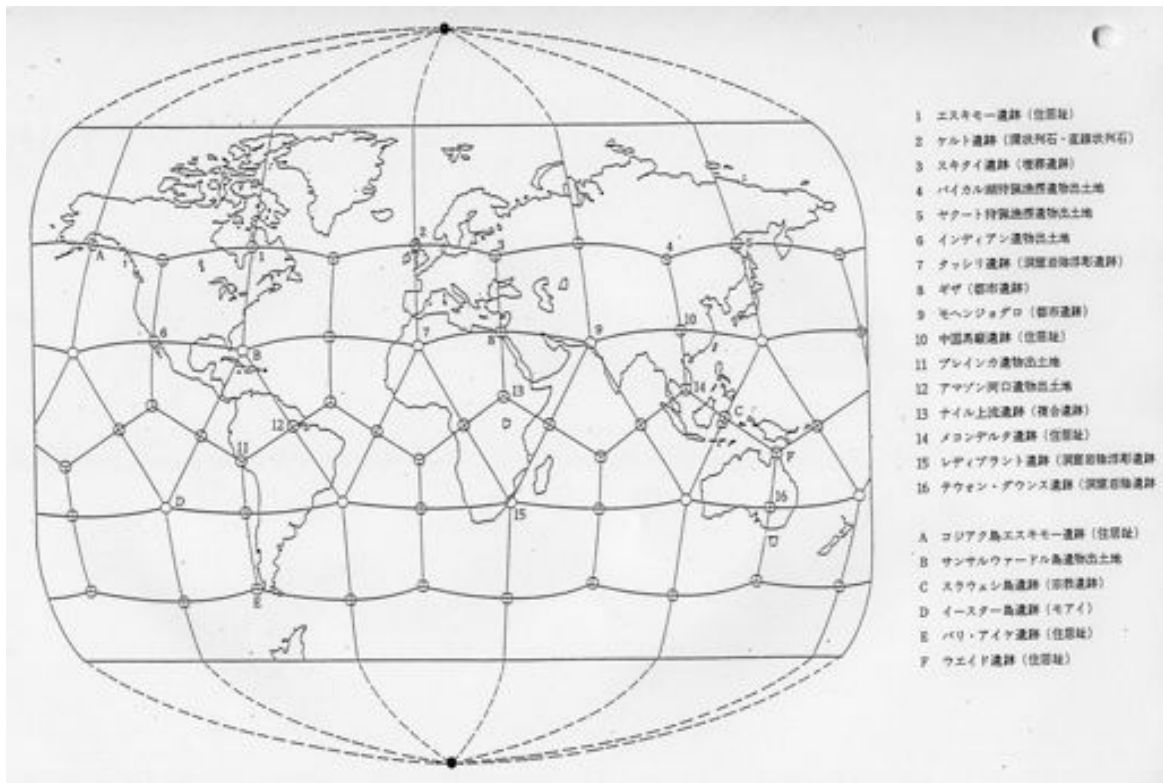


図4—6 地球結晶ネットワークの交点の遺跡

れそれが常時沸き出していたのかも知れない。それは多分現在でも継続していよう。但し時代が降るにつれて地中からの特異エネルギーの噴出を感知する能力が人類から失われて行ったから交点に集住するようなことがなくなってしまう。集住と言うよりも交点を神域として崇敬したのであってその神域の近傍に人々が集住したのが眞実に近いであろう。又特異エネルギーの感知能力にたけた人々は同時に地球外視点も有していたのである。当然地球表面は結晶状にエネルギーが電流さながらに流れているのがわかったであろうし自分達が神域として崇敬する場所も結晶体の頂点であることも熟知していたに違いない。こんな結晶体を呈する地球表面の半分（夜の部分）、たとえば日本からユーラシア大陸の大半以上に夢通信の菱形光ネットワークが張り巡らされているのも宇宙

から見る事が出来たに違いない。

太陽のネットワーク

こそ経絡である

インドのタントラ密教で「ナデイ」と呼ばれる霊妙な気力の繊維からなる網目が肉体全体に張り巡らされていてこれが中国医学では経絡に当るであろう。このナデイを通して太陽と月の諸々のエネルギーが潮流状に流れるとインドの人々は考えている。人体に見立てられた大地（地球）で経絡に当るものは太陽のネットワークであろう。目に見える龍脈ではないはずである。太陽のネットワークはそのまま太陽エネルギーを運ぶ道でありこれこそ経絡にふさわしい。それではつばに当る場所は何処か

と言うことになる。これこそ太陽のネットワークの交点である。古代人は地球上の経絡、経穴（つぼ）を地球の完全調和のための調整装置とみなしていた。それで何らかの理由たとえば天災などで調和が崩れるとこの通信網を活用して再調和を計ったに違いない。コンピューターで割り出した交点には必ず巨石遺跡がある。巨石遺跡は地球医療の針である。

中国医学では神経はそう重要視されることはないと言う。又臓器にしても正確には把握されていない。どちらかと言えば観念的である。食に関わる六腑のうち三焦と言う臓器は解剖学上は存在しない。そうであるからと言って古代中国人が解剖学的知識が不足していたとは思えない。中国人も本来は遊牧民を元祖とするのであり遊牧民は動物を虐殺し身を切り開くことを日常としているから彼等の先祖伝

来の解剖学的知識は豊富であったはずである。それなのに脳や神経などに無関心に見えるのは「氣」を重視したからにほかならない。中国人は脳や神経を無視して経絡、経穴（つぼ）を重視したのは病気はその氣の流れがスムーズでなくなっていると考えたからである。中国の風水術では山の尾根を龍脈とし経絡に見立てているがこれは割合早く中国の中心地では夢通信が作動しなくなって忘れられてしまったからではないだろうか。中国東北地方では現在でも夢通信する行者がいると言うからかつては中国の中心地でも限なく夢通信網は張り巡らされていた。又東北地方の夢通信行者はそのまま漢方（中国）医術の達人でもある。実際その行者の一人に私は北京滞在中に出会った。この人は後に日本にもたびたび来て医療を行っているはずである。要するにこんな行者は気功の名

人であって宇宙、大地の気を人間の体内に融通無礙に交通させることができるのである。

大和、近江の太陽ネッ

トワーク

夢通信網の発見は三輪山と大和三山の位置関係が整数比のピタゴラスの三角形をなしていることだけからなされたわけではない。それ以前に琵琶湖東岸に起立する神奈備山三上山の山頂と真東に真二つに割れた巨石が山頂にありこれを御神体としている太郎坊神社の太郎坊山頂を結びと正確に東西線に二八度五〇分をなしていて三輪山張り出し台地を通る冬至線と平行していることがわかっていった。三上山も三輪山同様山そのものが御神体でありこの神社を三上神

社と言う。三輪山はかつて大和湖の東にそびえていたのであり、どうも三上山とは双子の関係だったと思える。大和湖上に浮ぶ耳成山は丁度琵琶湖上に浮ぶ竹生島か沖島にあたる。湖とその東湖岸に紡錘形の神奈備山、更に湖上に浮ぶ小島と酷似の風景を見せている大和と近江に冬至の日没と夏至の日の出を指し示す方向に神奈備山と三山又は太陽信仰を示す神社が並んでいる。更に琵琶湖の東北岸には冬至の日没方向に七つの神社が正確に一列に並んでいる線、竹生島の

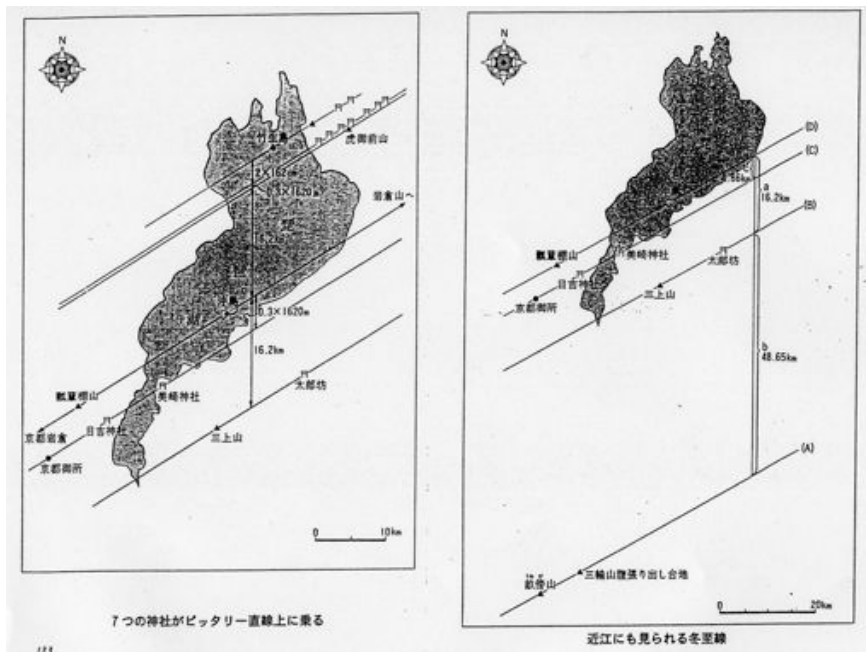


図4-7 7つの神社がピッタリ一直線上に乗る 近江にも見られる冬至線

頂上と小丘頂上更に神社二つが同じく冬至方向に正確に一列に並ぶ線などがありこれ等を五万分の一の地図上に描いているうちに基本単位南北に一六二〇メ

ートルとその三〇倍、四八・六キロメートルとする冬至線（冬至の日没方向を示す線）を得ることが出来た。三輪山張り出し台地を通る冬至線と三上山々頂を通る冬至線の南北間が四八・六キロメートルなのである（図4-7）。

更に大和近江地方の入る巨大五万分の一地図上に三輪山張り出し台地を基点とする冬至線と夏至線（夏至の日没方向の線）を南北間四八・六キロメートルごとに描いて行くとその線上に神社や修験道場のある山の山頂が乗っている。これを全国に拡張して描いてみると交点や線上に富士山々頂や島根縣の日継神社で有名な熊野大社が乗っているのがあった。この太陽光のネットワークが夢通信の通信網であることは私自身の特殊な体験から気付き、後に中国北京で中国東北（かつての満州）地方では現在でも巨石の傍に横たわっ

て薄明の頃に夢通信を行う行者が相当数いることを知った。『縄文夢通信』を書いた後である。いずれにしても列島上に正確な冬至線・夏至線の交叉する菱形スーパードグラフィックを描くことが出来た人々は極めて高度な測量技術を体得していたはずである。それには勿論幾何学知識も必要なのは言うまでもない。ところがこれを証明する原基が兵庫縣高砂市生石神社の御神体石として保存されていたのである。このことに気付いたのは当然私自身である。縦横高さ五メートルほどの立方体石であるがこれを解析してみるとこの石は太古の科学知識の貯蔵庫であり円周率や黄金率まで隠されていることがわかった。丁度エジプト、ギザの第一ピラミッドのようなものである。この生石神社の立方体は万葉集にも何時の時代からのものなのかわからない、神代からのものであると伝えら

れているとうたわれている。

コンピュータで割

り出された交点

北は北海道から南は沖縄本島までの全ての交点をコンピュータで計算して割り出した(図4-8・4-9・4-10・4-11)。これは『縄文夢通信』発行後のことである。それを更に青森県から鹿児島県まで五万分の一の地図に記入してみたがその結果不思議なことに全部で七八ヶ所のうち都市は勿論のと小さな集落の中にすら一ヶ所の交点たりとも位置していない。即ち全交点には歴史上最も人口の多い現在ですら人は全く居住していない。これはこの交点には人が住まない何らかの土地の力が秘められていることを示し

ているに違いない。又現在までにこの全交点のうち一四一五ヶ所ほど巡って調べた結果そこには必ず巨石が実在した。人が居住せず又これも不思議ではあるが田圃の中に位置するものもなかったから往古からの巨石はそのまま残されたのであろう。高知県の西部幡多郡の山深い村であつたと思うがこの交点の場所が川岸になつていたのでどんな所か知りたくて丁度用事があつて近くに来ていたので立ち寄つた。目指す場所は小さな川の中であつたが(緯度経度計で計つた)そこに高さ三メートルほどの巨石が一つ川中にぼつんと立っているではないか。しかもしめ縄を巻いている。この巨石は現在でも神石として崇められているらしい。この時に私の発見した夢通信網は正しいと確信した。

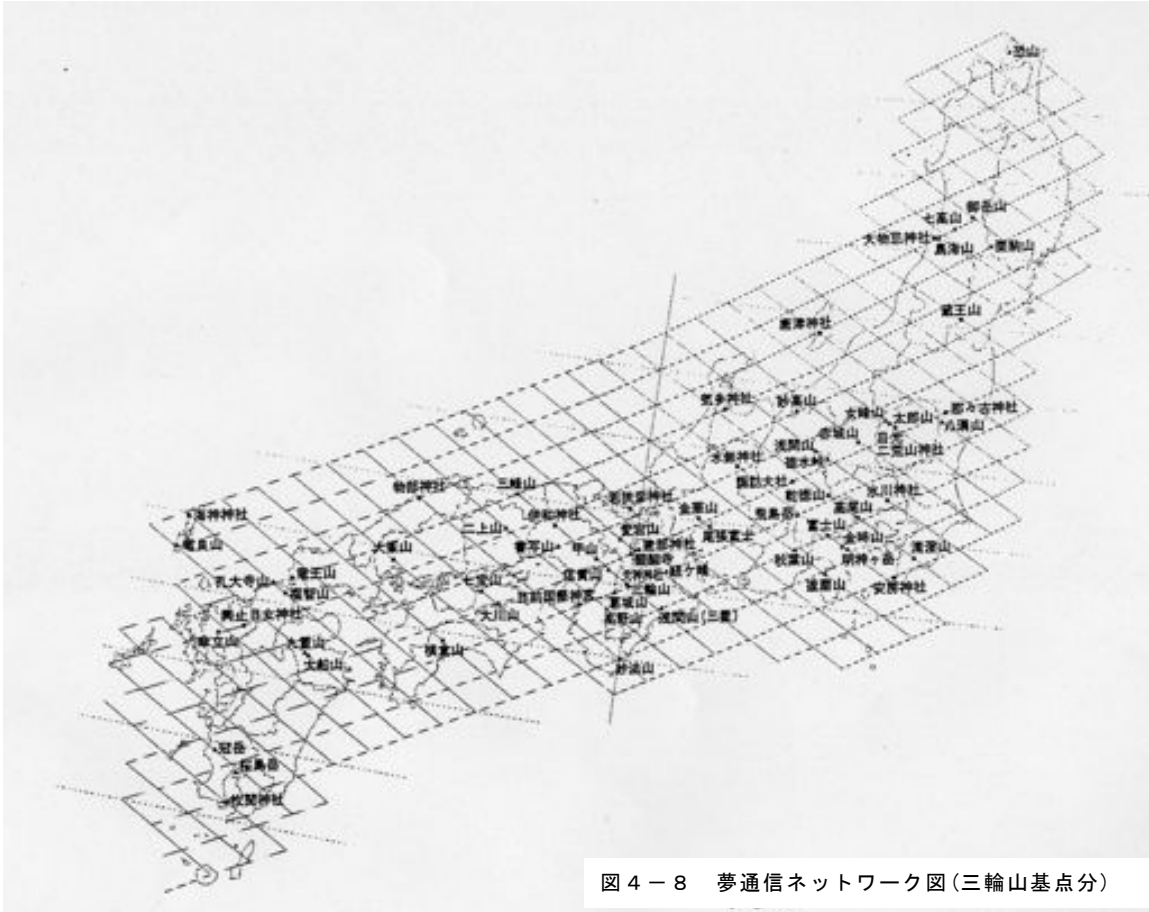


図4-8 夢通信ネットワーク図(三輪山基点分)

冬至線と夏至線の交点			北緯	東経	地名
41° 06' 16"	140° 36' 51"	青森県東津軽郡外ヶ浜町石浜	36° 30' 01"	137° 18' 55"	岐阜県益田郡東白川村
40° 39' 57"	140° 37' 28"	青森県黒石市花巻	34° 57' 56"	136° 50' 16"	愛知県知多市日長
40° 13' 39"	140° 38' 05"	秋田県大仙市森田	37° 09' 29"	136° 49' 47"	石川県能登郡中能町河内
39° 47' 20"	140° 38' 40"	秋田市仙北郡田沢湖町鹿嶋	36° 43' 10"	136° 49' 53"	富山県高岡市陣笠山野
39° 21' 02"	140° 39' 14"	秋田県平鹿郡山内村	35° 24' 14"	135° 52' 01"	福井県速岐郡若狭町(朽木裏)
38° 54' 43"	140° 39' 48"	秋田県湯沢市滝沢山	34° 18' 28"	136° 21' 11"	三重県北宇治郡大紀町大平
40° 13' 39"	141° 35' 38"	岩手県九戸郡山形村戸呂町	34° 57' 56"	135° 52' 01"	滋賀県大津市
39° 47' 20"	141° 36' 20"	岩手県下閉伊郡岩手町小巻巻	34° 31' 37"	35° 52' 01"	奈良県桜井市三輪
39° 21' 02"	141° 37' 01"	岩手県遠野市山口	34° 05' 18"	135° 52' 01"	奈良県吉野郡十津川村
38° 54' 43"	141° 37' 40"	宮城県唐松町陣ヶ森	33° 39' 00"	135° 52' 01"	和歌山県東牟婁郡那智郡湯町小阪
38° 28' 24"	140° 40' 20"	宮城県黒川郡色麻町	35° 24' 14"	134° 53' 57"	兵庫県豊岡市妻村
35° 02' 06"	139° 42' 53"	山形県西置賜郡小国町足野水	34° 57' 56"	134° 53' 52"	兵庫県西脇市明善寺
38° 02' 06"	140° 40' 51"	宮城県白石市川崎田	34° 44' 47"	134° 24' 45"	兵庫県赤穂市南吉町
37° 35' 47"	139° 42' 17"	福島県耶麻郡高郷村家津窪	34° 31' 37"	134° 53' 46"	兵庫県淡路市宍波
37° 35' 47"	140° 41' 21"	福島県安達郡川俣町山木屋	35° 24' 14"	133° 55' 50"	鳥取県東伯郡三朝町坂本
37° 09' 29"	140° 41' 51"	福島県いわき市三和町松枝	35° 24' 14"	132° 58' 00"	鳥取県松江市佐倉
37° 09' 29"	139° 45' 41"	福島県南会津郡田島町藤生	34° 31' 37"	131° 59' 35"	鳥取県益田市紙張
36° 43' 10"	140° 42' 19"	茨城県高萩市高萩	34° 57' 56"	133° 55' 48"	岡山県久米郡美咲町末光
36° 43' 10"	138° 45' 55"	群馬県吾妻郡中之条町日向見	34° 31' 37"	133° 55' 37"	岡山県玉野市天神
36° 16' 51"	138° 46' 12"	群馬県甘楽郡妙義町寺山	34° 57' 56"	132° 57' 50"	広島県庄原市中先達
36° 43' 10"	139° 44' 04"	栃木県今市市大塚	34° 31' 37"	132° 57' 33"	広島県三原市津久
36° 16' 51"	139° 44' 27"	栃木県小山市栗川	34° 05' 18"	131° 01' 15"	山口県下関市河内
35° 50' 33"	138° 46' 29"	山梨県東山梨市広瀬	34° 05' 18"	131° 59' 13"	山口県玖珂郡国東町石鹿明神
35° 50' 33"	139° 44' 49"	埼玉県さいたま市赤山新井南	34° 05' 18"	133° 55' 26"	徳島県三好郡三好町井久保
35° 50' 33"	140° 43' 14"	茨城県鹿嶋郡波崎町太田	34° 05' 18"	132° 57' 17"	愛媛県今治市袖田高田
34° 57' 56"	139° 45' 30"	千葉県館山市	33° 39' 00"	132° 57' 01"	愛媛県上浮穴郡久万高原町植谷
38° 28' 24"	139° 42' 28"	新潟県岩船郡山北町中俣雲	33° 39' 00"	133° 55' 16"	高知県香美郡物部町中津尾
38° 09' 29"	138° 45' 37"	新潟県中魚沼郡川西町伊勢平沼	33° 12' 41"	132° 56' 45"	高知県幡豆郡十和村屋敷
37° 35' 47"	138° 45' 18"	新潟県三島郡寺泊町志戸橋	32° 46' 23"	132° 56' 32"	高知県土佐清水市汐見町
36° 43' 10"	137° 47' 51"	長野県北安曇郡白馬村段	33° 39' 00"	131° 00' 48"	福岡県豊上郡築城町下方
36° 16' 51"	137° 48' 03"	長野県南安曇郡堀金村	33° 12' 41"	131° 00' 22"	大分県白田郡小国町谷山
35° 50' 33"	137° 48' 14"	長野県木曾郡日義村	32° 46' 23"	130° 01' 48"	長崎県津平市上原
35° 24' 14"	137° 48' 25"	長野県下伊豆郡下条村大久保	33° 12' 41"	129° 04' 20"	長崎県北松浦郡小縄賀島
34° 57' 56"	137° 48' 36"	静岡県天竜市カシ山	33° 12' 41"	130° 02' 19"	秋葉県武雄市朝日町甘久
34° 57' 56"	138° 47' 00"	静岡県沼津市戸田	32° 46' 23"	130° 59' 57"	熊本県上益城郡西原村
35° 24' 14"	138° 46' 45"	山梨県富士吉田市富士裾野	32° 20' 04"	130° 59' 32"	熊本県埴原郡水上村坂木
36° 16' 51"	136° 49' 59"	岐阜県大野郡白川村瀬加岩	32° 20' 04"	130° 01' 18"	熊本県天草郡河浦町今富
35° 50' 33"	136° 50' 05"	岐阜県郡上市内ヶ谷峠	31° 53' 45"	130° 59' 09"	宮崎県西諸郡高泉町前野
35° 24' 14"	136° 50' 10"	岐阜県各務原市朝岡	31° 27' 27"	130° 58' 46"	鹿児島県肝臓郡大崎町下持留
			30° 34' 50"	130° 58' 01"	鹿児島県姶野郡中種子町町宮

図 4-9 冬至線と夏至線の交点

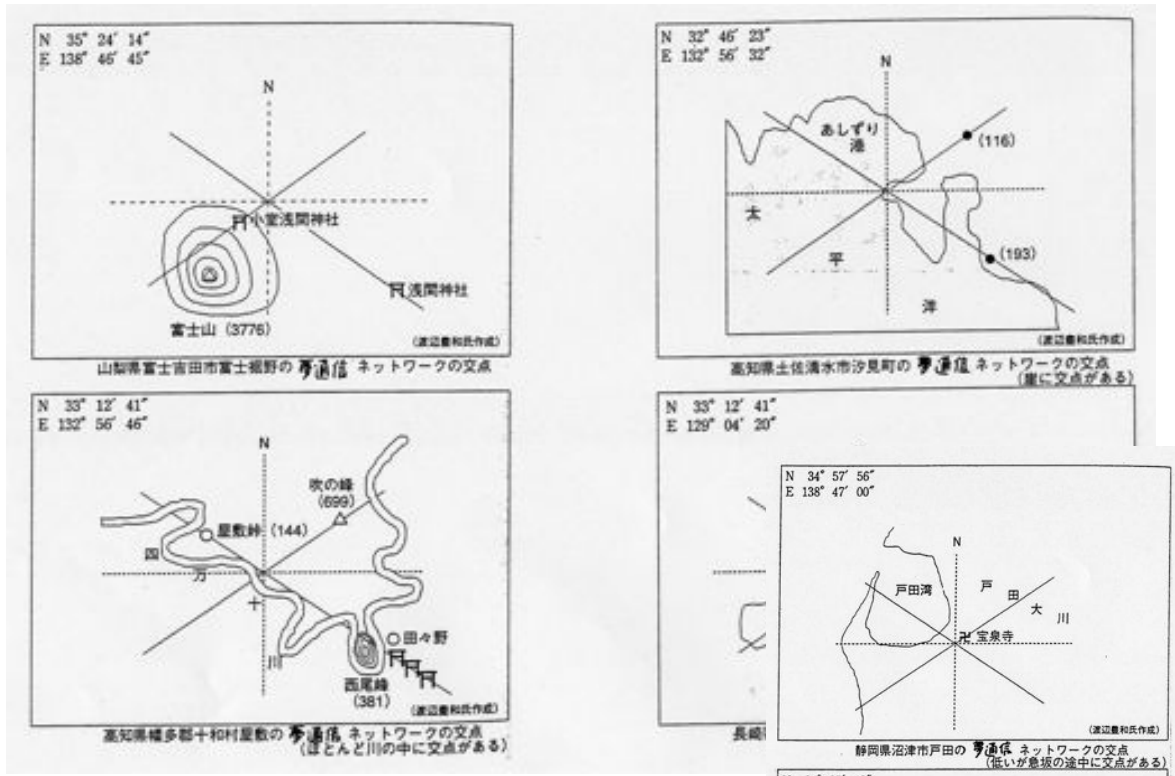
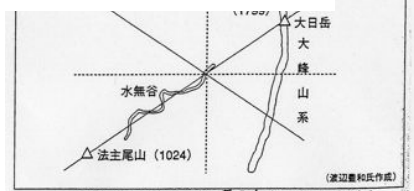


図 4-10



つい最近エジプトのギザの第一ピラミッドとエジプト最古のピラミッドであるサツカーラと、夢通信網を世界に拡張して得た交点Aとの三点が三辺が三対四対五になる聖三角形を形成していることを発見した。五対一二対一三のメソポタミアの聖三角形を形成する夢通信ネットワークの交点は北緯四三度三〇分近くである。この緯度は北海道中部にあり早速調べてみると北緯四三度三〇分五九秒に三点ある

図4-11

ことがわかった。そのうち旭川市の中心から五〇キロ東南東に位置する交点が注目している。新得町六沼山（標高一

三・四・四メートル）の深い山中にあるがこれと夢通信ネットワーク上で三辺が五対一二対一三を成す聖三角形を得る二点を割り出してみると二点とも崖の突端に当り明らかに巨石遺跡の存在を思わせている。これは今後詳細に調べてみる必要がある。

縄文のイメージと地

球医療

縄文時代の人々の日常生活は大湯のストーンサークルやアイヌの森の中での生活更には住居などからおよその想像がつく。当時の人々は極めて素朴ではあるが鮮明な宇宙像を描いていた

らしい。星雲の姿を知っていたに違いない。

これは勿論望遠鏡があつて得た知識ではない。ユングもした夢の中の宇宙旅行で見た光景であるに違いない。これは夢の中で得た知識が現行の天体望遠鏡をのぞいて知る知識と変らなかつたことを示しているが、これだけで正確な宇宙の知識を得るのに十分な夢見の技術を縄文の人々は持っていたのである。この技術があればこそ地球の外から地球の全体像を見ることができたし、地球を一つの巨大な結晶体として把握することも可能であつた。唯イヨマンテなどの極めて素朴なまつりと夢通信による地球医療の高度な技術とが同時に行われていたのは奇妙に思えるかもしれない。これはこう考えるべきではないか。今から一五一〇〇年前に一夜にして大海に没しアトランティスの

文明が縄文時代にも伝承されていたが時代が下るにつれてその技術は低下していった。イヨマンテなどの素朴なまつりも夢通信が盛んに行われていた時代には必しも今から見るのとは違い素朴には見えなかつたであろう。夢が中心の文明であるから動物も人間より下等なものと思われてはいなかつたはずである。獣面人身の怪物が神話などによく登場するのもこれを神話として伝えた時代の人々には怪物とは思われていなかつたからであろう。夢に登場する極くありふれた人間、動物の混血種として当時の人々には親しまれていた。そんな時代ではイヨマンテは必しも素朴とは言えまい。

むしろ縄文時代の人々は一所懸命にまつりの場所を作った。能登半島の先端、富山湾に面した真脇から出土したウツドサークルはそのことをよく物語っている。直径八〇センチを越える

栗の木を縦に真二つに割りそれを一〇本正確な円周上に等間隔に並べている。サークルの直径は九メートル位であるが五〇〇〜六〇〇年間に八度も同じ場所に建て替えた跡がある。発掘されたのは栗の巨根だけでありこのウッドサークルがどんな形をしていたのかはわからない。一九八六年にNHKから依頼されてこれの想像復元をしたが、私は地上五メートルはゆうにある高床、円形舞台としたが人々はこの舞台で踊ったのは勿論のこと、この舞台は夢通信、地球医療の重要な施設ではなかったのかと今思うのである。ウッドサークルはBC一〇〇〇年程度のもので縄文時代は晩期に当る。それ以前のウッドサークルは発掘されていない。多分それ以前はストーンサークルがまつりの場所として作られたからであろう。三内丸山の南一〇キロにある小牧野ストーンサークルも秋

田県伊勢堂岱ストーンサークルも円形劇場風なのはそのことを示しているであろう。地球医療のための直接的な装置は磐座、磐境、鏡岩の夢通信の三点セットでありこれは針の役割を果たさずである。夢通信の交点に来る山は夢通信三点セットと同じく針である。BC二七〇〇年前後に作られたストーンサークルは寒冷化の医療装置であったが大湯のストーンサークルの西にあるクロマンタ山、小牧野ストーンサークルの真東にある雲谷峠それぞれ美しい紡錘形のピラミッドであり、これはBC四〇〇〇年時の温暖化を癒すために作られこれは灸だったはずである。これに対してストーンサークルは針だったというわけである。しかしストーンサークルやウッドサークルはそこでまつりごと、即ち地球医療を行うシヤーマンのための舞台であり劇場であった。地球医療を真剣に

行っていた頃の人々は自分達の乗り物である地球を如何に浄化するかに日々闘っていた。いまだ利己的にはなっていない遺伝子であった。

了